

令和3年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団	
施 設 名	大分県立総合文化センター (iichiko 総合文化センター)	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	18,917	(千円)
公演事業	8,678	(千円)
人材養成事業	3,396	(千円)
普及啓発事業	6,843	(千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	日本の西洋音楽発祥の地 プロジェクト ～中世・バロック 音楽会シリーズ～	①7月1日(木)※ ②11月28日(日)※ ③12月10日(延期)	①東京コンソーツ ※出演者変更、 ②アントネッロ ※規模縮小、 ③小林道夫氏の腕の故障により延期	目標値	840
		iichiko 音の泉ホール		実績値	453
2	ホール付属ジュニア オーケストラ定期演奏会	3月21日(月)	iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ、 清水醜輝(指揮)、宇野健太(チェロ)、 大分県立芸術文化短期大学学生	目標値	650
		iichiko グランシアタ		実績値	617
3	若手演奏家インレジデンス	2月21日(月) ～27日(日)	水谷 晃(ヴァイオリン)、渡邊智道(ピアノ)、 長石篤志(ヴァイオリン)、宇野健太(チェロ)	目標値	600
		iichiko 音の泉ホール		実績値	561

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和3年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ホール附属ジュニア オーケストラ育成	育成:通年 イベント:7月30-31日	iichiko グランシyata・ジュニアオーケストラ、 大分県立芸術文化短期大学学生、 川瀬麻由美、高田喜夫、ほか	目標値	団員在籍 80名、 イベント 参加者 40名
		iichiko SpaceBe iichiko グランシyata		実績値	団員在籍 62名、 イベント 参加者 87名
2	ホールレセプションист育成	6月24日~26日 9月12日、29日 2月(中止)※	角屋里子 ※2月研修は、新型コロナウイルス感染症 まん延防止等重点措置により中止	目標値	新規登録者 50名以上
		iichiko グランシyata iichiko 音の泉ホール		実績値	新規登録者 48名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	演奏家派遣事業 (アウトリーチ)	7月26日 ～3月15日	地元若手アーティスト	目標値	18件 720名
		県内各地		実績値	18件 979名
2	子ども向け劇場・楽器体験 イベント	①9/11(中止)※ ②11/6 ③8/6-9 ④7/28 ⑤5/29、9/15、12/14	①アトリウム遊園地 ※中止 ②ちくわフル ト体験ワークショップ ③ミュージカル体験ワークショップ ④演劇体験ワークショップ ⑤アコインソラコンサート	目標値	①3,000名 ② 20名 ③ 50名 ④ 20名 ⑤1,800名
		①iichiko アトリウムプラザ ②～④iichiko SpaceBe ⑤iichiko 音の泉ホール		実績値	① - ② 24名 ③ 33名 ④ 5名 ⑤1,434名
3	社会人向け 芸術文化教養講座	①1/22 ②8/6-9 ③10/26 ④8/25、9/29、11/10 ⑤6/30、1/12、11/20	①歌舞伎レクチャー ②ミュージカル体験ワーク ショップ ③バレエレクチャー ④西洋音楽史 レクチャー ⑤中世・バロック音楽レクチャー	目標値	① 100名 ② 20名 ③ 300名 ④ 40名 ⑤ 150名
		①②SpaceBe ③音の泉ホ ール ④県立美術館 ⑤SpaceBe、県立美術館		実績値	① 80名 ② 19名 ③ 216名 ④ 88名 ⑤ 98名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

社会的役割(ミッション)と地域特性を踏まえて事業を組み立て、新型コロナの影響は一部あったものの、おおむね予定通りに事業を進めることができた。

<社会的役割と地域特性の把握>

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団（以下、当財団）の社会的役割（ミッション）は、芸術文化の本質的価値の追求と、人材育成や社会包摂を通じた社会的・経済的価値の実現である。当財団では、日本有数のホール機能を誇る大分県立総合文化センター（以下、当センター）を活用し、異文化受容と文化多様性に富んだ歴史的な地域特性（中世の大友宗麟時代における西洋音楽をはじめとする南蛮文化受容など）を踏まえ、県立美術館、民間施設（ホテル、オフィスなど）と一体整備された施設特性を活かし、そのミッションに取り組んでいる。また、平成30年度に本県で開催した国民文化祭&全国障害者芸術・文化祭を受け、主たる会場となった当センターでは、そのレガシーとして①県民総参加、②異分野コラボ、③人材育成をさらに発展させる事業立案が求められていた。

<事業の適切な組み立てと予定通りの事業推進>

このため、令和2年度より「西洋音楽発祥の地プロジェクト」をスタートさせ、地域資源の発掘・磨き上げを目指した。2年目となる本年度では、令和4年度開催の西洋音楽発祥の地をテーマにした県民協働の創作公演に向け、中世・バロック音楽の演奏会などを通じて機運を盛り上げた。創作公演においては、大分県の芸術文化発信の最大拠点として、ホール機能の優位性を十全に活かし、県内実演団体の協力を得て、感性・創造性に富んだハイレベルの公演を目指す。「東アジア文化都市2022大分県」の閉幕事業にも位置づけられ、公演を通じて大分の文化力を国内外に発信することが期待されている。あわせて、社会人向けの普及啓発や、ホールレセプショニストの人材養成においても、西洋音楽発祥の地に関わる情報を発信し、中世大分が創造的人材の宝庫であったことを伝え、多面的に機運醸成を図った。これらの諸事業を、普及啓発⇒人材養成⇒公演といった連続したサイクルとして戦略的に展開することで、県民の鑑賞力・実演力向上に取り組んだ。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

以下の通り、事業の文化的、社会的、経済的意義が継続して認められる。

<文化的意義>

公演1「日本の西洋音楽発祥の地プロジェクト」において、大分にゆかりある「天正遣欧少年使節」の音楽劇や古楽器のコンサートを、年間通じてシリーズで開催し、さらに隣接する大分県立美術館でも南蛮文化の展覧会を開催することで、大分県が「西洋音楽発祥の地」であるという認知度が高まった。

<社会的意義>

県立の総合文化センターとして、当センターから遠方の地域にも生のクラシック音楽を届け、芸術文化の普及を進める役割を担っている。このため普及啓発1「演奏家派遣事業」で、地元若手アーティストによるアウトリーチを県内各地の小中高校や保育園で18回実施したほか、公演3「若手演奏家インレジデンス」の事業でも4回実施した。公演後のアンケートには「知らない曲でも楽しかった」や「コンサートに行ってみた」などの意見が数多く寄せられた。アウトリーチはこのような子どもたちが音楽に触れる機会を提供するとともに、コロナ禍で演奏機会が減少した地元アーティストの技術向上や活動の場の提供にも寄与している。また、普及啓発2の事業の一つである「ワンコインリレーコンサート」では、字幕や手話、点字プログラムを活用して鑑賞支援を行った。

<経済的意義>

新型コロナの影響はあったが、県外からも一定程度の来場者があり（公演1「日本の西洋音楽発祥の地プロジェクト」6.4%、公演3「若手演奏家インレジデンス」4.4%）、来場者の消費活動（移動や飲食等）による経済波及効果があった。また、人材養成1「ジュニアオーケストラ育成事業」で、団員の研修に、県立芸術文化短期大学（以下、芸短大）の学生が参加し一緒に演奏したことで、団員が芸短大に進学するきっかけになるなど、将来の音楽産業の基盤づくりにもある程度の寄与をしたと考える。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

一部事業に新型コロナの影響はあったが、おおむね目標を達成することができた。

公演本体の魅力を伝えるためのレクチャーといった普及啓発や、公演の経験を通じた県内人材養成など、公演・人材養成・普及啓発の3事業を連続したサイクルと捉え、あらゆる層の県民が実演芸術を鑑賞、実演できる場となるよう戦略的な取り組みを行った。

<公演事業>

大分県の芸術文化発信の最大拠点として、ホール機能の優位性を十全に活かし、県内実演団体の協力を得て、感性・創造性を育み、大分の歴史文化に根ざした質の高い実演芸術の公演に取り組んだ。中世・バロック音楽の演奏会などを通じて県民の機運を盛り上げ、令和4年度に西洋音楽発祥の地をテーマに県民協働の創作公演を開催する。

【目標①】 大分県が「西洋音楽発祥の地」であるという認知度を高めて、地域を誇る気持ちが高まったと感じる人を増やす： 中世・バロック音楽の演奏会などを通じて、県民の機運を盛り上げることで、令和4年度開催の創作公演への期待感が高まった。また、隣接する大分県立美術館で南蛮文化の展覧会を行い、美術と音楽の両面から認知度を高められた。

【目標②】 若年層の来場者を増加させる： 各公演、25歳以下の割引や学生券を設定し(入場無料は除く)、多くの青少年が来場した。

【目標③】 質の高い公演を行うことによって、来場者の満足度を向上させる： コロナの影響により県民参加企画などの中止や出演者の変更があったが、開催できたものは、どの演奏会も満足度の高い公演であった。特に古楽器アンサンブルの演奏は、これまで鑑賞の機会が少なく、多くの来場者から好評を得た。

【目標④】 with コロナのなか、安心・安全に鑑賞してもらう環境を整備する： ガイドラインに基づき感染症対策を徹底した運営を行い、多くの県民から安心して鑑賞できたという評価をもらった。

以上の取り組みを通じて、次代を担う若い世代による創造性、芸術性の高い公演が実現できた。

<人材養成事業>

ホール付属のジュニアオーケストラや、彼らの舞台を支えるレセプションニストを育成することで、感性・創造性の豊かな人々が様々な分野で活躍・交流できる場をつくり、地域社会の活性化を図った。

【目標①】 オーケストラの練習環境を整え、団員を増やす： 夏のフェスティバル以降、団員は増加している。同様のフェスティバルは令和4年度も継続して実施したい。

【目標②】 定期演奏会以外にミニコンサートなどの発表機会を設ける： 夏のフェスティバル以外に、大分県立美術館主催の企画展「サンリオ展」とコラボレーションしたミニコンサートを実施した。

【目標③】 活動に取り組むことで、参加者の知識や教養を高める： 地元の大学講師のほか、国内外トップレベルの外部講師を招聘することで、知識や教養だけでなく、感性や技術も高まった。

【目標④】 安定したレセプションニストの登録者数を維持する： 新規募集の結果、48名の現状を維持することができ、主催共催公演で活躍していただいた。

<普及啓発事業>

県民が年齢、障がいの有無、経済的状況、居住地域にかかわらず、等しく文化芸術を享受できるよう、子どもや障がい者、遠隔地居住者などに向けた活動を重点化した。特に、コロナ後の子どもたちの鑑賞・体験機会の拡充を図った。

【目標①】 アウトリーチを積極的に展開し、遠隔地の県民に芸術文化の鑑賞機会を提供する： コロナ禍により、応募してくる学校数は減少したが、県内の幅広い地域でアウトリーチを展開することができた。

【目標②】 子どもたちの鑑賞・体験企画を拡充し、芸術文化の未来のファン・担い手を育てる： アトリウム遊園地は、子どもたちへのコロナ感染拡大時期と重なったため開催できなかったが、それ以外で幅広いジャンルの企画を実施し、多くの子どもたちが鑑賞・体験できる機会を提供した。

【目標③】 社会人をターゲットとした事業を展開し、創造的人材の育成につなげる： 専門家を招いて、西洋音楽史講座(3回シリーズ)や中世音楽講座、さらにバレエや歌舞伎に関連したレクチャーを実施することで、参加者から大変好評をいただいた。

以上の取り組みに際しては、当財団に設置された「おおいた障がい者芸術文化支援センター」の協力も得て、福祉・医療・教育等の他分野や近隣商店街との連携を十分に図った。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業期間は適切で、新型コロナの影響による企画の中止・変更は一部あったものの、おおむね当初の計画通りに進んだと評価できる。

入場者・参加者数というアウトプット指標の目標達成状況(実績値/目標値、目標値=100)を確認すると、8事業中6事業は、計画の80~130%の範囲に収まっている。残る2事業で達成率の低かった要因は次のとおりである。

公演1「日本の西洋音楽発祥の地プロジェクト ~中世・バロック音楽会シリーズ~」: 新型コロナウイルスの影響による県民参加企画などの中止(②音楽劇「天正遣欧少年使節の物語」)や、出演者の変更(①古楽器アンサンブルのコンサート)、小林道夫氏の腕の故障による公演延期(③チェンバロコンサート)があった。

普及啓発2「子ども向け劇場・楽器体験イベント」: 「さまざまなジャンルの芸術文化体験イベント<アトリエむ遊園地>」は当初、9月11日開催を予定していたが、全国的に新型コロナウイルス感染者の急増により令和4年2月に延期したものの、2月もまん延防止等重点措置が発令されたため、中止することとした。

なお、人材養成2「ホールレセプション育成」は2月研修のみ、まん延防止等重点措置で中止となったものの、新規登録者数は計画の96%となり目標をほぼ達成した。

全ての公演において、ガイドラインに基づく感染症対策を徹底した運営を行い、多くの県民から安心して来館できたという評価をもらった。

入場者・参加者数の実績値の目標達成状況 (目標値=100)

事業	公演事業			人材養成事業		普及啓発事業		
	1	2	3	1	2	1	2	3
実績値/目標値	54	95	94	124	96	136	31	82

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費は適切で、新型コロナの影響による企画の中止・変更は一部あったものの、おおむね当初の計画通りに進んだと評価できる。

事業期間の欄に記載したとおり、一部事業に中止・変更があったため、事業費が当初の見込みに対して減額となったが、その分の経費で会場設営や運営補助の人員を増員して感染症対策を徹底したほか、人材養成1「ホール付属ジュニアオーケストラ育成事業」においても、地下練習室で予定されていたリハーサルを、ホールでのリハーサルに切り替えるなど、安心安全でクオリティの高い鑑賞環境を実現することができた。

あわせて公演3「若手演奏家インレジデンス」や人材養成1「ホール付属ジュニアオーケストラ育成事業」において、ズームによる打合せやオンラインレッスンを大いに活用するなど、感染症対策と経費節減の両面から効率性の向上に取り組んだ。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当財団の有する広域的な人材・団体ネットワークと、当センターが有するわが国有数のホール機能という、ソフト、ハード両面のリソース(資源)を最大限に活用し、日本の西洋音楽発祥の地プロジェクトに代表される芸術性・独創性の高い企画を実現して大勢の県民に参加・鑑賞をいただいた。

【視点1】劇場・音楽堂等が地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮するための資源

(1) 劇場・音楽堂等を象徴する人物、鍵となる人物の存在

- ・上原恵美 氏：当センター顧問。大分県にゆかりがあり、元滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長。当センター事業について監修。
- ・川瀬麻由美 氏：ジュニアオーケストラ芸術監督。大分県立芸術文化短期大学教授で音楽科長。桐朋学園大学卒で、梓室内管弦楽団のコンサートマスターなどの経歴を持つ。
- ・小林道夫 氏：大分県由布市在住の日本を代表する鍵盤楽器奏者。わが国におけるバロック音楽、特に J.S.バッハ研究の第一人者で、歴史的な音楽家とも数多く共演している。当センターでは、「西洋音楽発祥の地」プロジェクトの主要演奏者としてチェンバロリサイタルを開催している。
- ・水谷 晃 氏：大分市出身、東京交響楽団コンサートマスター。公演3「若手演奏家インレジデンス」の中心となる人物で、令和4年度もジュニアオーケストラ定期演奏会のソリストを務める予定。

(2) 専属団体、フランチャイズ団体、提携団体

【専属団体】

- ・iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ：小学校3年生から22歳までを対象とするホール付属として平成21年度より活動開始。団員数60名。26年度より芸短大との連携を強化し、芸短大との合同演奏会や、県内公立文化施設への団員派遣など、県全体の芸術文化振興を牽引している。

【提携団体】

- ・大分県立芸術文化短期大学：平成21年3月に当財団と友好交流協定を締結。相互の事業に対し、講師の派遣を行うなど、全面的な協力関係にある。
- ・大分県芸術文化振興会議：県内の芸術文化団体の活動支援や連携を目的とした団体。152の芸術文化団体が加盟しており、情報共有や県民参加型などの連携事業を展開している。

(3) 創造活動に関わる建物設備等

3.5面舞台やオーケストラピットなど、優れた舞台機構を備える大ホール「グランシアタ」(1966席)と、音響に定評がある中ホール「音の泉ホール」(710席)という日本有数のホール機能を有する。さらに、同一施設内にホテルが併設され、当センター地下には充実した練習室エリアが備わっている。こうした、アーティストが滞在して創造活動を行える環境が、公演3「若手演奏家インレジデンス」の実現につながった。また、九州圏内で本格的なバレエやオペラが上演できる会館が少ないため、定期的にバレエやオペラの上演に取り組んでいる。

【視点2】地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する事業として優れた点

(1) 公演の企画内容、作品の芸術性、独創性、新規性、先導性

公演1「日本の西洋音楽発祥の地プロジェクト」、公演3「若手演奏家インレジデンス」はともに、当センターの独自企画である。公演1は、わが国における「西洋音楽発祥の地」という大分の歴史性を踏まえたコンセプトが多くの人から共感を得るとともに、評判も高く、劇場としての価値を高めた。令和4年度はさらに発展させ、このプロジェクトの集大成となる創作舞台に取り組む。公演3は、大分県ゆかりの演奏家4人がチームを組んで大分に1週間滞在する間にピアノ四重奏を創りあげる新たなチャレンジとして話題を呼び、専門誌でも「アウトリーチもこなしつつ、音楽的にも一切の手抜きがない真剣勝負の一週間」(『音楽の友』2022年5月号152頁)という高い評価を受けた。

公演2のジュニアオーケストラでは、本県出身でウィーン留学後は故郷を拠点とするチェロ奏者の宇野健太氏を招き、初のチェロ協奏曲となるチャイコフスキー「ロココ様式による変奏曲」[原典版]に挑戦した。宇野氏は公演3に参加したアーティストの1人でもあり、地域アーティスト人材を活用する取り組みとして展開した。

公演鑑賞だけでなく、専門家を招き、公演をよりわかりやすく楽しんでもらうための事前レクチャーを実施し、どの講座も参加者からは大変好評をいただいた。このような教養講座を求める声が多く、今後の企画においても拡充させていくことで、本公演に対する興味の喚起につなげたい。

(2)文化芸術情報の整理、蓄積、提供、発信

当センターと隣接する県立美術館を合わせた一帯を「芸術文化ゾーン」と称し、本県の芸術文化の中心拠点として位置づけ、芸術文化団体をはじめ、教育、産業、福祉、医療など様々な分野の団体等とのネットワークを構築し、県内芸術文化活動の情報発信と賑わいあふれる空間づくりを目指している。

芸術文化ゾーンは、本県中部に位置する県庁所在地大分市の中心市街地にあり、JR や高速道路で県内各地域と結ばれているなど、交通の便に優れている。各地の県民に当センターを訪れてもらうにしても、逆に各地にアウトリーチを行うにしても、最も効率的・効果的な立地条件にある。

文化芸術情報の整理・蓄積に関して当センターでは、自主制作の公演は毎回、記録映像を撮影・保存している。こうした情報蓄積をベースに、財団広報誌で、当センター開館 20 周年やジュニアオーケストラ設立 10 周年などのあゆみを節目節目で整理し、発信している。

また、大分県芸術文化友の会「びび」は、当センターと県立美術館共通の会員組織である。会員向け(広報誌の制作や、公演・展覧会情報の郵送・メール)や、マスメディア向け(プレスリリース)も、美術館と一緒に情報発信することで、実演芸術ファンにとどまらない広範な層へ波及を狙っている。

さらに、大分県公立文化施設協議会等の県内ネットワークの枠組みを活用し、「大分ホールナビ」と称する共同広報や研修事業、共催事業、調査研究等を市町村の文化施設等と連携して実施し、相乗効果を発揮している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった(と認められる)か。

大分県が長期総合計画に掲げる政策「創造県おおいた」(創造性と多様性に満ち、文化・社会・経済の活力にあふれた大分県)を、新型コロナの影響下にあっても、県と協力して、その実現に向けた取り組みを進めることができた。お客様の期待・ニーズは、来場者アンケートなどで把握し、今後の企画に反映させることで、地域の文化芸術の発展につなげている。

<ステークホルダーの期待>

当財団は、施設設置者である大分県の政策「創造県おおいた」の実現を図るべく、隣接する県立美術館とともに、県民の幅広い欲求に応えられる多様な文化事業を実施することで、潤いのある県民生活の創造と健やかで個性ある地域づくりに寄与することを目的としている。

当センターが主催する事業については、県民参加型で質の高い公演として、評価を受けている。県はまた、ホール利用率 87%という目標を設定しており、その達成に向けて、幅広い層に当センターを知ってもらい、新たに利用してもらえるよう営業活動にも努めている。

令和 3 年度は新型コロナによる貸館需要減少で、ホール全体の利用率は 64.0%に止まるなか、自主事業(本件公演)については、感染症対策を徹底して計画的に実施することで、コロナの影響下においてもステークホルダーの期待に応えた。

<地域のニーズ>

最終的なステークホルダーであるお客様・県民からの期待・ニーズについては、主催事業の来場者にアンケートを実施するなどして、利用者意見・要望の聴取及び分析に努めている。特に令和 2 年度より感染症対策のため、全てのアンケートにクリップペンを添付して配布したことにより、例年 2 割弱であった回収率が飛躍的に向上(公演事業: 47.5%、普及啓発: 55.3%)した。

県内には、音楽・美術を専門に教育する県立芸術文化短期大学、県立芸術緑丘高校、私立大分中学・高校という芸術教育機関が存在し、複数のアマチュアオーケストラ団体、合唱団体、バレエやダンス教室が存在するなど、実演者の人口が多い。しかしながら、彼らが一堂に会する機会は少ないため、今回の公演「日本の西洋音楽発祥の地プロジェクト」といった共通のテーマをもとに、令和 4 年度に舞台芸術を創作し、彼らの相互交流を促進していきたい。『ムジカと生きる』と題するこの創作公演は、平成 30 年度の国民文化祭オープニングステージの演出・振付を担当した穴井豪氏を総合監督に迎え、クリシタン大名 大友宗麟、天正遣欧少年使節団、ペトロ・岐部・カスイなど、芸術文化を軸に大分の歴史をリサーチした当プロジェクトの集大成といえる舞台である。「東アジア文化都市 2022 大分県」の閉幕事業でもあるこの公演が、大規模修繕にともなう休館を次年度に控えた当センターが、県民と共創する大分文化の新たなレガシー(未来に継承する財産)となることが期待されている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

当センター、県立美術館などを擁する当財団は、組織全体の中期経営戦略計画(2019～2022)に基づき、PDCA サイクルを着実に回すことで、組織活動の持続的な発展を図っている。

<経営全般>

当財団は、当センター、県立美術館、財団本部(経営管理、広報連携、ファンドレイジング・事業評価支援、障がい者芸術文化支援等)などから構成され、組織全体の中期経営戦略計画(2019～2022 年度)を平成 31 年 3 月に策定・公表している。当該計画をもとに、当センターのミッション、ビジョン、地域の特性・ニーズ、施設の強み・特色を明らかにし、事後の評価結果を財団全体でフィードバックし、その結果を令和 3 年度の劇場・音楽堂等機能強化推進事業に反映させている。このように、中期計画(P)をベースに、実施(D)・評価(C)・改善(A)のサイクルを着実に回していきたい。一方、近時のコロナ禍を踏まえるに、感染の拡大・収束の動向を切れ目なくウォッチし、計画の臨機応変な見直し・改善を図ることも等しく重要といえる。計画性と柔軟性の適切なバランスを取ることが、財団の活動の持続的な発展を図るうえで不可欠である。

<人材面> (令和3年度 企画/広報担当課 14 名、ただし財団全体職員 64 名)

自主事業については当センターの担当課(企画普及課)全員でチームとして対応し、情報を共有するとともに、事業ごとに主担当と副担当を割り当て、知識・経験の継承・高度化に努めている。近年はセンター・県立美術館間での相互異動や、大規模な芸術文化ゾーンイベントでは財団総出で対応するなど、横断的な取り組みも活発化しており、美術館との連携会議も定期的に開催している。また「働き方改革」に対応した労働環境の整備のため、チケット販売方法やジュニアオーケストラ事務局の体制の改革にも取りかかっている。

その他に、開館以来 21 年間継続するホールレセプションистのボランティア「emo スタッフ」(登録者数 48 人)がいる。出演者が舞台上で最高のパフォーマンスを行い、その非日常の空間を来場者が楽しむうえで、彼らは欠かせない存在となっている。

<財務面> (令和3年度事業費 当センター自主事業決算見込額 97 百万円、ただし財団全体決算見込額 1,075 百万円)

財団の主な収入源は、県からの指定管理料と施設使用収益だが、その他にも民間からのファンドレイジングの多角化を試みている。財団全体としては、当センター、美術館共通の会員組織である大分県芸術文化友の会「びび」の会費収入がある。また、当センターに関しては、地場企業である三和酒類(iichiko)のネーミングライツ(命名権)も重要な収入源となっている。

さらに今年度事業においては、人材養成1「ホール付属ジュニアオーケストラ育成事業」で、3 社より企業協賛金を獲得しており、これからも引き続き、大規模な公演事業で広く協賛金を獲得するとともに、友の会法人会員の拡充を目指していきたい。

<各方面とのネットワーク>

大規模な制作舞台公演やイベントを企画することで多くの団体との連携が強化された。特に、大分県芸術文化振興会議の加盟団体における他団体間交流の深まりは、県民参加による創作舞台「西洋音楽発祥の地プロジェクト」創作舞台の展開へとつながっていく。

<施設面>

防災訓練の実施に加え、防災研修も実施している。また、職員のみを対象としていた防災訓練に、ボランティアスタッフ等にも参加してもらうことで、より実態に則した訓練を実施している。

また、当センターは開館(平成 10 年 9 月)から四半世紀を迎え、大ホール「グランシアタ」、中ホール「音の泉ホール」を令和 5 年 4 月～6 年 5 月中旬まで休館して耐震天井改修工事を行う。ホール天井の耐震改修による安心安全の確保、よりバリアフリーやダイバーシティに配慮した施設改修、舞台制御・調光設備の高度化を図って観客の満足度を高めることで、県民から一層愛される芸術文化の拠点として、当センターの持続可能な運営を実現したい。